

飛鳥・奈良時代の漢詩とその研究の現状

仲谷 健太郎*

要旨

飛鳥・奈良時代(上代)の日本の文献は、漢字で書かれた日本語文と中国語文に大別でき、それぞれ散文と韻文に分かれる。韻文には和歌と漢詩が含まれ、和歌は『万葉集』や『古事記』、『日本書紀』、そして一部の歴史的資料に収められる。和歌の多くは写本により伝わるため、文字列の揺れが生じる。ただし、飛鳥・奈良時代に書かれたままの和歌も一部存在する。

漢詩は、『懐風藻』などの文学作品や歴史的資料に見られ、特に『懐風藻』は120以上の上代漢詩を収録する。また、木簡や正倉院文書の楽書、金石文にも漢詩が見られる。しかしこれらは和歌に比して研究状況が芳しくなく、未詳な事柄も多い。

本稿は、上代の漢詩研究の歴史と現在の状況を概観し、今後の研究の方向性を考えるためのものである。『懐風藻』および上代の歴史資料における漢詩の先行研究の状況を整理・批判し、そのうえで、現状『万葉集』など他の上代文学作品に比べればその研究状況の遅れはあるものの、着実に進展していることを論じた。そして今後の漢詩研究の展望について、東アジアの国際関係の中で読むことこそがその理解を発展させ、また、上代日本漢詩の独自性を考察していくことの重要性を指摘した。

キーワード：上代文学、漢文学、漢詩、懐風藻

1 はじめに

飛鳥・奈良時代(以下、上代と記す)に日本で成立した文献における文字列を二分すれば、漢字表記された日本語文と中国語文とに大別できる。またそれらはそれぞれ、形式的な制限を加えられない散文と、韻律や音数などに制約される韻文とに概ね分けられる。

ここで韻文と位置付けられるものは、和歌と漢詩である。現存する上代の和歌はその大部分が『万葉集』に収められるほか、『古事記』や『日本書紀』、『風土記』などにも収載される。これらの和歌は殆どが写本により伝来するため、訓読注釈に先立つ文字列の確定が要求され、文字列が確定できないがゆえに、その解釈に揺らぎが生じることが少なくない。しかし、上代に書かれたままの姿を残す和歌も、金石

* 宮城教育大学教職大学院 准教授

文や木簡、正倉院文書などの歴史的資料に僅かながら存在している。

一方、これら和歌に対照的な存在であるのが漢詩である。いわゆる文学作品は『懐風藻』がその筆頭であり、天平勝宝三年(七五二)の書誌を持ち、飛鳥から奈良時代に至るまでの詩およそ一二〇首を収める、上代漢詩群としては一大のものである。

また、ほぼ同時代に編まれた『万葉集』¹⁾にも、

「日本挽歌」前置七言詩(5・新七九七)

「悲歎俗道仮合即離易去難留詩一首^非」(5・新九〇一)

「七言晚春三日遊覽一首^非」(17・新三九九五)

「七言一首」(17・新三九九九)

の四首の漢詩を認めることができる。平安期、天長四年(八二七)の成立ではあるが、勅撰三集の一つ『経国集』にも石上宅嗣や藤原宇合、淡海三船などの奈良時代の人物の詩や対策文が含まれている。

これらは伝本による本文異同の問題をはらむものの、上代漢詩を群として残しその体系的調査が可能な点で、研究の基軸となる重要な存在である。

また歴史資料としては木簡や正倉院文書の楽書に記された、完形、断片の漢詩がみえる。また、金石文にみえる韻文類もそれに準ずるものといえよう。これらは『懐風藻』等の文学作品にみえる漢詩に比べれば、その数は圧倒的に少ない。しかし文学作品の間隙を埋めるものとして、その文学的意義をまづみいだすことができる。そしてなにより、これら伝存資料に記された漢詩の重要性は、それが書かれた原本であり、校勘の必要性がない生の資料であるということ、そして今後の新出資料の出現が高い確率で期待できることに尽きるだろう。

上代漢詩の数は、『万葉集』をはじめとする上代和歌の伝存数には遠く及ばない。しかし唐風文化時代ともいえる上代においては、韻文文芸のありかたは、

大津皇子の初めて詩賦を作りしより、詞人才子、風を慕ひ塵を継ぐ。彼の漢家の字を移して、我日或の俗を化す。民業一たび改つて、和歌漸く衰ふ。(『古今和歌集』真名序)

と評されるように、漢詩がそのメインストリームであったことはいままで

もない。しかし現在の上代文学研究においては、韻文研究といえば『万葉集』がその中核に位置しており、上代漢詩研究はその辺縁に位置付けられてきたように思われる。特定分野の発表論文数が必ずしもその分野の研究深度を示すわけではない、ということはあらかじめ断っておかなければならない

が、上代漢詩を扱った論文数、取り組む研究者の数は、決して多くない。具体的な数値を例示するとすれば、国文学研究資料館「国文学論文目録データベース」への登録論文数が一つの指標となり得るだろう。本稿を執筆現在(最終更新日:二〇二三年九月八日)、『万葉集』の項には一八一八八本が登録されている一方、「漢文学」の項への登録は四三八本と、懸隔は明らかである。決して和歌研究に比して盛んであるとはいえない状況だろう。またそうした状況も手伝つてか、例えば『懐風藻』の研究史については、後述する注釈書類に注釈史がまとめられることはあっても、『懐風藻』という作品の研究がいかなる立ち位置にあるのかを眺めるものはない。また歴史資料における上代漢詩の研究は、後述するようにそもそも研究史といえるほどの数がない。

本稿では『懐風藻』と歴史資料における漢詩の研究史と現状を概観し、上代漢詩研究の今後の展望を探ることを目的とする。

二、『懐風藻』の研究の現状

(一) 伝本研究と本文批判

土佐朋子氏『懐風藻』伝本および本文の諸問題」(『東京医科歯科大学教養部研究紀要』四四号、二〇一四年)は『懐風藻』の研究が盛んでいないことについて、

『懐風藻』の作品研究が立ち後れている要因の一つは、伝本系統が明らかにされておらず、最善本文が確定されていないことにある。漢詩文研究は、漢籍における出典や韻の考察が必要不可欠である。典拠や韻が考察できなければ作品そのものを解明することは不可能である。しかし、本文が確定されないままではそれらを確実に進めることはできない。昨今では電子検索システムの向上と普及により、以前よりも網羅的な出典考証が可能になった。しかし、それも確かな本文にもとづいて初めて有

効なものになる。本文が確定されないままでは、出典考証も韻にもとづいて、本文整備の問題に起因することを指摘している。早くは一九二四年に『校本万葉集』が刊行されたことに比べ、『懐風藻』は定本といえるテキストが存在せず、本文校訂は個々の注釈書等が都度独自に行っていた。例えば積清潭氏『懐風藻新釈』（丙午出版社、一九二九年）は研究における本文校訂の必要性を認め、たうで、「此れを為さざるは読者の読み易きを主とすればなり」と、『宝永二年版本』の本文をそのまま用いている。以降も戦前の諸注釈は、刊本の相互参照によって本文確定を行ってきた²²。

明確に本文批判を打ち出したものは、大野保氏『懐風藻の研究 本文批判と注釈研究』（三省堂、一九五七年）を待たねばならなかった。しかしそれ以来、『懐風藻』の伝本研究は興隆の兆しをみせる。田村謙治氏「懐風藻の基礎的研究（諸本について）」（『城南紀要』六号、一九七〇年三月）、『懐風藻研究史』―江戸版本の書入について―（『城南紀要』八号、一九七二年三月）、伊藤坦菴書入本『懐風藻』についての一考察（『懐風藻研究』二号、一九九八年三月）、『懐風藻の諸写本』（辰巳正明氏編『懐風藻』―漢字文化圏の中の日本古代漢詩―）笠間書院、二〇〇〇年一月）と伝本に関する研究が継続された。近年においては土佐朋子氏が未紹介写本の紹介を積極的に行っている²³。

こうした『懐風藻』の伝本研究の一つの到達点が、土佐朋子氏編『新典社研究叢書35 校本懐風藻』（新典社、二〇二二年）である。三五本の写本、四本の版本が対校に用いられ、かつ諸本の解題も極めて充実している。戦前の注釈書においては版本類数点しか参照できなかったのに比べれば、参照可能な伝本の数は驚異的に増加している。前掲土佐論文の本文整備に関する懸念はほぼ解消されたといえるが、これは翻つて、今後の『懐風藻』研究においては、より高精度な本文の検討が要求されることとなるだろう。

（二）注釈史について

他の上代文学作品に比べ、『懐風藻』は注釈書に恵まれず、その注釈史も

新しい。現在確認できる最も古い注釈書は、元治二年（一八六五）の自序を持つ、今井舎人（鈴木真年）の『懐風藻箋註』²⁴である。また、注釈書ではないものの、『狩谷椽斎書入本』（寛政版本）書入、部分注）、『伴直方自筆校正本』（『群書類従本』書入）も近世の注として挙げられよう。しかし『懐風藻』の注釈史が厚みを持つようになるのは、結局のところ近代、昭和に入ってからであった。

昭和期、戦前の注釈書としては、

積清潭氏『懐風藻新釈』（丙午出版社、一九二七年）以下、『釈新釈』

沢田総清氏『懐風藻註釈』（大岡山書店、一九三三年）以下、『沢田註釈』

世良亮一氏『懐風藻詳釈』（教育出版社、一九三八年）以下、『世良詳釈』

杉本行夫氏（註釈）『懐風藻』（弘文堂、一九四三年）以下、『杉本註釈』

が挙げられる。戦後既に小島憲之氏²⁵が、戦前の注釈書について「現在としては注釈史的意義しかもたないものもある」と批判を行ったように、現在の学術的水準からみれば庸劣の感が否めない。しかし『杉本註釈』は小島氏が「すぐれた参考書」と高く評するように、語釈、校勘ともに入念に行われており、作詩事情などの補足にも相当な紙幅を割いている。他の戦前の注釈書の多分に漏れず、典拠の例示がやや粗略な部分も感ぜられるが、戦前期の注釈書としては図抜けた完成度であり、今なお示唆に富むものである。

戦後に刊行されたものには、まず大野保氏『懐風藻の研究 本文批判と注釈研究』（三省堂、一九五七）以下、『大野研究』が挙げられよう。全詩注釈ではないものの、『注釈篇』および『懐風藻用語典拠雑考』は実証的である。ついで刊行されたものには、林古溪氏『懐風藻新註』（明治書院、一九五八年）以下、『林新註』がある。『林新註』は組版が完成していたにも関わらず、戦災の影響により刊行がされず、作者の死後に刊行された。そのため、厳密には戦前の注釈書に並ぶものとするべきであろう。典拠の指摘は新説も多いたが極めて正確であり、それまでの注釈書ではあまり重視されていなかった作者伝記に対する注も充実している。小島憲之氏による書評にも、「定説となるべきもの頗る多く、諸注の最上位にあることは、諸手をあげて喜びたい」と絶賛されており、それまで注釈書に比しても卓越した完成度を誇るものであった。こうした精良な注釈書の出現が続いた戦後期において、小島

憲之氏『日本古典文学大系69 懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹』(岩波書店、一九六四年)以下、『小島大系』はひとつの金字塔といえよう。極めて厳密かつ実証的な注釈を試みたものであり、かつ典拠の分析は初唐詩も視野に入れた広範なものである。語義理解の点では、本書に及ぶものは今なお刊行されていない。ただし一首の理解という点では、『林新註』等比べてやや物足りない部分がある。それでもなお、現在においても詩の基本的理解に際しては最良の書であるといえよう。

以上に挙げたように、戦後、六〇年代までは『懐風藻』注釈の充実が図られた時期であった。『大野註釈』『林新註』『小島大系』は現在でも一級のものであり、作品の基礎理解において、支柱となる存在である。六〇・七〇年代に『懐風藻』を扱う論が急速に増加するが、これらの注釈書によつて作品理解の基盤が形成されていたことは無関係ではないだろう。

研究の潮流がより発展的なものを志向するようになったことも手伝ってか、それ以降は『懐風藻』の全注釈を行うものはほぼ行われないようになる。『小島大系』以降に刊行があったものとしては、五四首を抄出、注釈した波戸岡旭氏『標註日本漢詩文選』(笠間書院、一九八〇年)がまず挙げられる。全注釈としては、江口孝夫氏『懐風藻』(講談社学術文庫、二〇〇〇年)があるが、著者が解題で「懐風藻に詩を感じ、詩をみいだせるように努めたのが拙著です」と述べるように、学術的理解よりも、詩の鑑賞に重きを置くことが察せられる。そのため、注釈、解説ともに鑑賞の補助となる程度の文量に抑えられている。

本書執筆現在、最も新たな注釈書としては、辰巳正明氏『懐風藻全注釈』(笠間書院、二〇二二年)以下、『辰巳全注釈』、および『懐風藻全注釈 新訂増補版』(花鳥社、二〇二一年)以下、『辰巳新訂』がある。本文校訂、注釈、解説を完備しており、ここまで挙げた諸注釈のうちでも、最も大規模なものであるろう。双方ともに漢籍における語句の用例を、『出典名』に「とある」の形式で列挙するのが特徴であり、その掲出範囲は極めて広範である。いわゆる典拠論的な語義解釈ではなく、対象の語句が漢詩文中においていかなる表現性を有するかを見極めようとする注釈態度がうかがえる。しかしその掲出意図が不分明な箇所もみえる。また、本文校訂上の問題が少なからずある

ことも指摘される¹⁰⁾。

さて、ここまで近世から現在までの『懐風藻』注釈史について概観してきた。当然のことではあるが、注釈と作品分析とは、相互にフィードバックし合う密接不可分の関係にある。現在『懐風藻』は、作品論や表現論など、様々な方法による研究成果が蓄積されている(後述)。「万葉集全注」が刊行時の最新の知見を多分に取り入れ、より清新な注釈が為されているように、現在の研究成果を取り入れた新たな注釈が可能な段階にあるのではないだろうか。

この点について、現在注目すべき試みがされている。『早稲田大学日本古典籍研究所年報』一一号(二〇一八年三月)には「懐風藻注釈稿」と題し、八百分の注釈が掲載されるが、それが「研究会における検討を経て、現在の研究状況に即した新たな注釈書の作成を目指し」たものである旨が序言に示される。掲載されている各詩の注釈は、本文・校異・韻字・作者・詩題・語釈・現代語訳・考察の項目からなる。さらに語釈においては、解釈のための明確な意図を持った用例の提示がされており、また釈義の問題を孕む箇所においては、先行注釈書や論文を踏まえた丹念な検討が加えられているなど、極めて誠実かつ精密な注釈態度を以つて取り組まれていることがうかがえる。注目すべきは考察の項であり、注釈対象詩が持つ詩想や詠作時期などの様々な課題について提示し、最新の研究成果も取り入れたうえでその解決を図っている。このような高水準の注釈が全詩に施されれば、現在の研究基盤の質がより押し上げられることは間違いないだろう。引き続き今後も成果の公表が期待される。

(二) 『懐風藻』にかかわる研究論文

注釈以外にも、それと並行して行われた『懐風藻』の研究は数多い。前節でも触れたが、『懐風藻』を扱う論文の数は六〇・七〇年代に急増し、現在も年々発表数が増加している。筆者の調査の限り、『懐風藻』に関わる既発表の研究成果は論文だけに限っても現在二五〇本以上あり、うち二〇〇〇年以降発表されたものは優に一〇〇を超えている。この動向からは、近年『懐風藻』研究が好況となりつつあることが看取できるだろう。

戦前までの『懐風藻』研究史については、小林渚氏『『懐風藻』研究

の現在——明治以降戦前までの論文から学べること——(『懐風藻研究』四号、一九九九年五月)に詳しく、参照されたい。本目では戦後、特に近年の注目すべき成果を中心に、粗略ではあるが現在の研究状況について触れていきたい。

『懐風藻』研究は現在、既に作品分析が中心となっており、編纂事情のようなテキストの外側に関する議論は穏やかな状況である。例えば編者について諸説あることは周知の通りであり、この点は山岸徳平氏「懐風藻概論」(『上代日本文学講座 第四巻』春陽堂、一九三三年)、および『小島大系』の「解説」に詳しい。しかし近年の編者に関する論は、八〇年代を境にほぼ途絶えている状態である。

それに対して、テキストの内側、作品の理解を深めようとする研究が現在ほぼ大勢を占めており、その方法論も多様化している。総論的に『懐風藻』を扱うものとしては、辰巳正明氏の「懐風藻の詩学」と題した一連の論考¹²が、総合的な理解の参考となるだろう。また胡志昂氏「近江朝漢詩文の思想理念」(『埼玉学園大学紀要 人間学部篇』一一号、二〇一一年一月)には、『懐風藻』中に貫かれる文治、礼楽の観念について論じられる。

『懐風藻』の散文部分——序、人物伝、詩序は、基礎理解を諸注釈書に拠る部分が大きかった。しかし二〇〇〇年前後にはそれらと向き合った好論が相次いで発表された。序については、波戸岡旭氏「懐風藻と中国詩学——『懐風藻』序文の意味するところ——」(辰巳正明氏編『懐風藻——漢字文化圏の中の日本古代漢詩——』笠間書院、二〇〇〇年一月)にその意義が説かれるが、黄少光氏「『懐風藻』序と唐人撰詩集」(『上代文学』八六号、二〇〇一年四月)や高松寿夫氏「『懐風藻』序文にみる唐太宗期文筆の受容」(『万葉』二一八号、二〇一四年一月)はそれらの様式、あるいは表現を唐代漢詩文に求めるものである。また人物伝に関しては、

加藤有子氏「大友皇子伝考」(『懐風藻研究』一〇号、二〇〇三年一月)
山口敦史氏「『懐風藻』の「陽狂」——釈智蔵伝をめぐって——」(『懐風藻研究』三号、一九九八年一月)

「東アジアの漢詩と僧侶——『懐風藻』僧伝研究序説——」(辰巳正明氏編『懐風藻——漢字文化圏の中の日本古代漢詩——』笠間書院、二〇〇〇年一月)

川上萌実氏「『懐風藻』人物伝と誄」(『和漢語文研究』一五号、二〇一七年一月)¹³
などをみることが出来る。

詩についての論考は、現在様々な角度からアプローチが試みられる。それらの手法は方法的にいえば、音韻論・様式論・表現論・作品論の四つに大別することができるだろう。無論それらは、比較文学的な手法を内包することはいまでもない。それらの方法論のいずれか、あるいは複数の方法論を往還し、分析結果を作品理解に還元するという研究手法が、現在の『懐風藻』所収詩の研究では一般的であるように思われる。

音韻に着目するものとしては、月野文子氏「『懐風藻』の押韻——韻の偏りの意味するもの——」(『和漢比較文学叢書2 上代文学と漢文学』汲古書院、一九八六年九月)が挙げられる。月野論文は収載詩の韻の偏在に着目したうえで、それが作詩の上で韻の制約(和韻・勒韻)に起因するものであることを推測し、作詩の場の検討につながることを論じている。月野氏の音韻を手掛かりとした分析手法は、『懐風藻』の七夕詩——製作時期と「同用某字」の法——(『桜美林大学中国文学論叢』一〇号、一九八五年三月)にも共通するものである。また、村上哲見氏「『懐風藻』の韻文論的考察」(『中国古典研究』四二号、二〇〇一年三月)は、『懐風藻』中の詩の韻律について中国詩学の立場から検討を加え、違例でないものは九首であることを指摘した。また様式についての考察は、まず波戸岡旭氏「『懐風藻』の侍宴詩について——作品構造とその類型——」(『國學院雑誌』七九巻四号、一九七八年四月)¹⁴、および『懐風藻』吉野詩の山水観——「智水仁山」の典故を中心に——(『國學院雑誌』八五巻一〇号、一九八四年一月)¹⁵を挙げるべきだろう。これらは詩の表現、構造の分析および中国詩との比較を通じ、詩の様式をとらえようとするものである。特に前者は侍宴詩の基礎的研究として、井実充史氏「『懐風藻』侍宴頌徳詩の基礎的考察——良辰・美景表現を中心に——」(『古代研究』二四号、一九九二年一月)にも引かれ、侍宴詩研究の引き金となったことがうかがえる。さらに井実氏の侍宴詩研究は「文武朝の侍宴應詔詩——唐太宗朝御製・應詔詩との関わり——」(『国文学研究』一一五号、一九九五年三月)、「『懐風藻』私宴詩の基礎的考察」(『言文』四四号、一九九六年二月)

などの様式研究へと展開していく。

表現論的・作品論的分析は『懐風藻』研究において現在最も顕著にみられるものである。戦後の早い段階で既に、小島憲之氏「上代詩の表現——懐風藻をめぐる——」（『香椎潟』八号、一九六二年二月）¹⁶、中西進氏「懐風藻の自然」（山岸徳平氏編『日本漢文学史論考』岩波書店、一九七四年）など、比較文学的研究に携わる上代文学研究者によって論考が打ち出されてきた。現在そうした試みはより細分化している。

表現論的な分析を試みる論としては、

月野文子氏「侍宴応詔詩の表現——「芳塵」と「聖塵」の語をめぐる——」（『和漢比較文学叢書』9 万葉集と漢文学』汲古書院、一九九三年一月）

加藤有子氏「『残岸』考——大伴旅人の漢詩をめぐる——」（『懐風藻研究』創刊号、一九九七年九月）

太田善之氏「天皇と拮抗する表現——采女比良夫詩「衛北辰」をめぐる——」（『懐風藻研究』創刊号、一九九七年九月）

ほか多数の論をみるが、いずれも詩句表現の用法や表現性の詳細な分析を手掛かりに、詩の解釈の深化を目指すものである。また、月野文子氏「山田三方の七夕詩における日本の発想——「衣玉」と「彩舟」をめぐる——」（『上代文学』六三号、一九八九年二月）や、小島憲之氏「上代詩歌にみる漢語的表現——「残」を中心として——」（吉井巖氏編『記紀万葉論叢』塙書房、一九九二年七月）¹⁷は、古典論的な立場に軸足を置きつつも、語や表現が内包する日本的（和歌的）発想の表出に着目するものである。またこれと関わって、モチーフや詩想の観点から『懐風藻』所収詩と和歌との関連をみいだそうとする、高松寿夫氏「『懐風藻』にみる上代美意識の形成状況——和歌との関連にも触れながら——」（『和漢比較文学』一五号、一九九五年七月）、多田一臣氏「『懐風藻』吉野詩の一面——漢詩文と和歌——」（西宮一民氏編『上代語と表記』おうふう、二〇〇〇年）などがあることも注目されよう。一口に表現論的といっても、その手続きは様々に層を成していることがうかがえる。一方、作品論的な研究には、渡辺寛吾氏の石上乙麻呂をめぐる論考¹⁸や、土佐秀里氏「文武天皇の漢詩——その歴史的背景と文学史的意義をめぐる——

——」（『日本漢文学研究』三号、二〇〇八年三月）など、詠作者とテキストの連続性、およびその意義を考察するものが見える。また、土佐朋子氏「大津皇子「遊獵」詩の論」（『古代中世文学論考』第二二集「新典社」、二〇〇八年一月）、高松寿夫氏「万葉歌人の漢詩——安部広庭「春日侍宴」をめぐる——」（『國學院雑誌』一一六巻一号、二〇一五年一月）のように、表現論的分析も併用することで一首の表現を精査し、対象の表現性や意義の理解をより深めようとする論もみえる。また、月野文子氏「紀末茂「臨水観魚」詩が描く朝隠——張正見詩から「渭水終須卜、滄浪徒自吟」を削除した理由——」（『上代文学』一一九号、二〇一七年一月）や、井実充史氏「『懐風藻』紀末茂「臨水観魚」について——楽府詩の実験的改作という観点から——」（『福島大学人間発達文化学類論集』三〇号、二〇一九年二月）は、和漢比較と表現受容の観点から、詩の持つ意義を考察したものである。

(四) 小結

以上、本節では『懐風藻』の研究史と現在の研究状況について概観してきた。先に挙げた研究成果は決して網羅的ではなく、現在公刊されている『懐風藻』研究のごく一部でしかない。研究史を構成する重要な成果はまだ多いものの、そうした好論を蕪雑にして示せていないことは、ひとえに筆者の力不足である。

研究の遅れが指摘される『懐風藻』であるが、発表される研究成果や、取り組む研究者の数は確実に増加している。『懐風藻』研究の立ち上りは確かに遅かったかもしれないが、その追い上げには目を見張るものがないだろうか。研究における方法論も明らかに獲得されており、今後は安定した方法論の下、より高い次元の研究が展開されることが予想できるだろう。

三、歴史資料の漢詩について

前章で示した写本によって伝わる『懐風藻』と異なり、出土遺物や伝世品として現存する文字資料——正倉院文書や木簡などの中にも、漢詩が書かれたのがみえる。ただしこれらについては、前掲した『懐風藻』と同様に

上代漢詩の一つと位置付け得るものであるが、考古的資料の性質を持つゆえか、その文字列が持つ文学的性質にも向き合った研究には乏しいのが現状である。

まず、木簡にみえる漢詩についてみていく。完形で残るものは私見の限り、平城京二条大路出土木簡¹⁹の、

山東□南落葉錦

巖上巖下白雲深

獨對他鄉菊花酒

破淚漸慰失侶心(□□判読不明箇所、以下同)²⁰

の七言詩を挙げられよう。また、平城京左京二条二坊出土木簡²¹、および平城宮内裏北方官衙地区出土木簡²²に共通して現れる漢詩の断片と思しき文字列について、小島憲之氏「海東と西域——啓蒙期としてみた上代文学一斑——」(『文学』五一巻一二号、一九八三年二月)²³が比較的早くに語釈を試みている。近年、村田右富美氏「木簡に残る文字列の韻文認定について——「送寒衣」、「七夕四」など——」(『上代文学』一〇五号、二〇一〇年十一月)が当該漢詩断片文字列について、文字列の推定と音韻、表現の分析を行い、

昨夜秋風急、今朝白□飛

故京千万里、誰為送寒衣

との本文の釈読と、「正格の五言絶句」としての認定を行った。村田論文はその認定の手續きにおいて、

中国語韻文は平仄と押韻という二つの大きな機制が存在するため、一定の文字数が存在すれば、この二つを認定フラグとして、その文字列が中国語韻文であると認定できる。

と論じる。前項の『懷風藻』や次節以降に触れる歴史資料にみえる上代日本漢詩は、中国漢詩に比べ、平仄や押韻などの不整備が指摘されている。その点で村田論文が設けた音韻という基準は、あくまで『正格の中国語韻文(『漢詩』)の判定において十全に機能するものであることは理解せねばなるまい。しかし上代日本漢詩の音韻の不整備は、行われていないことと同意ではない。音韻を手掛かりにそれを韻文として認めることが可能であるとの示唆は貴重である。

こうした韻文としての認定に手續きが必要な例は、他にもいくつかの例を

みることができ。例えば飛鳥池遺跡出土木簡²⁴にみえる、

白馬鳴向山 欲其上草食

女人向男咲 相遊其下也

の文字列の存在はいまでもなく有名だろう。公表当時の報道に、

漢詩の木簡(長さ二一センチ、幅二・四センチ)は七世紀後半の溝から発見された。……対句になっているが、第二句と第四句で韻を踏むなどの

漢詩の規則には従っていない。(『朝日新聞(朝刊)』一九九八年九月五日)との記述がみえるように、当初からこれを非正格な漢詩とみなす言質があった。確かに五字・四句という構成を目にすれば、五言絶句的にもみえるが、平仄並びに韻への目配りはみえず、これを漢詩と認めることはためらわれるものがある。漢詩風の文章と理解するのが穏当であろうか。犬飼隆氏「七世紀木簡の国語史的意義」(『木簡研究』二三号、二〇〇一年三月)の和歌を書いたものかとする説があることも諾えよう。同様に、藤原宮跡東方官衙北地区出土木簡²⁵に、「□雪多降而甚寒」とみえる文字列がある。一見漢詩的表現にも思えるものの、前掲小島論文は「雪多降」が和習的であり、書簡表現かと推測する。また前掲村田論文には、「雪多降而甚寒」:「雪多降而甚寒」など和歌の一部である可能性が示される。いずれにせよ、これを漢詩の一部と判断することは難しいだろう。

一方、確実に漢詩の一部であると判断できるものとしては、平城京左京二条二坊出土木簡²⁶の「萬里人南去三□」を挙げることができる。初唐詩に、

萬里人は南に去り、三春雁は北に飛ぶ。

〔万、人、南、去、三、春、雁、北、飛。〕(韋承慶「南中詠雁詩」、『全唐詩』四六／于季子「南行別弟」、同八〇)

と右の木簡と共通する文言がみえることから、漢詩の一部である蓋然性は非常に高い。しかしこれが韋承慶詩、ないし于季子詩なのか、あるいはそれらの表現を借用した詩なのか、さらにはそれが中国漢詩なのか、日本漢詩なのかも判然としない。

なお後述する正倉院文書などにもいえることだが、『千字文』や『文選』など漢詩文の一部を習書したものが確認されている。それらについては本稿では考察対象外とするが、上代での漢詩文受容の様相を看取するための貴重

な資料といえよう。

また、平城京左京二条二坊出土木簡²⁷にみえる、「憶漢月 萬里望向關」の文字列も、前掲小島論文に、

「憶漢月」が詩題であり、一字分空白を置く「万里」以下の五言が詩の部分に当ることが類推される。みはるかす万里を望みつつ国境の関所に向かつてゆくことが五言の冒頭句の内容とみたいと指摘されている。「漢月」は、

関山漢月に連なり、隴水秦城に向かふ。(北周・庾信「出自薊北門行」、『樂府詩集』六一・雜曲歌辭一)

など、六朝・唐の従軍詩をはじめとする旅詩類にみえる表現である。また「万里望」も、

雄心四海を志し、万里風塵を望む。

〔雄心志四海、万里望風塵。〕(晋・傅玄「予章行」、『芸文類聚』四一・樂部一・論樂)

などの例をみることができる。こうした語彙を含む点、旅に関わる何らかの漢詩の一部かとも思われるが、句数や音韻からの判断はできず、韻文として認定する手掛かりに欠ける。仮に小島論文に従い「万里望向関」²⁸を初句とみなした場合、仄起式の起句とは平仄が合わず、日本漢詩の可能性があるだろう。

次に、正倉院文書における漢詩習書についてその例をみていく。正倉院文書には多くの楽書がみえるが、うち漢詩が完形で残るものとしては、「造東大寺司牒案」(天平勝宝二年(七五〇)三月三日)²⁹の七言詩、

万里三春重歲華

訪酒追琴入仙家

林間探影逢明月

谷裏尋香值落花

および「造仏所作物帳」(天平六年(七三四)五月一日)³⁰の七夕詩序と五言詩

二首

孟秋良辰 七夕清節

涼氣初升 鳴蟬驚於園柳

素露方凝 金螢燒於砌草

于時 紛綸風土 酌滲之吉日

倩盼淑女 穿針之良夜

当此時也 豈得投筆 人取一字各成二韻

皎々河東女 迢々漢西牛

銜怨待七夕 巧咲懷三秋

面前開短棹 別後悲長愁

誰知情未極 反成相望悠

度月照山裏 古神遊河間

幸相三淺別 不醉客非還

が挙げられる。また木簡と同様に、以下に挙げるような不完全な形の韻文らしい文字列も認められ、その性質の検討が必要であろう。

まず、

山静林泉麗骨然獨坐披尋老子

山山静泉麗骨然獨坐

心為明時盡君門尚不容

男蘭為時盡君聞

田蘭迷経路婦去欲何從

田蘭迷経路婦去欲何從容(経師楽書、宝龜二年(七七二)六月一三日附収)³¹

は橋本進吉氏「南京遺芳解説」(『南京遺芳附卷』一九二七年)や『定本書道全集 第八卷(飛鳥、白鳳、奈良時代)』(河出書房、一九五六年)の飯島春敬氏による解説には、筆すさみの詩文であると述べられている。小島憲之氏「奈良朝文学より平安初頭文学へ」(『言語と文芸』二巻一号、一九六〇年一月)³²には、

山静林泉麗、骨然獨坐(一字脱か)、披尋老子(以下脱)

君門尚不容、田蘭迷経路、婦去欲何從。

との釈文が載せられ、前半は出典不明であるものの、後半「心為明時尽」以下の劉幽求「書懷」(『搜玉小集』)を書写したものであることが指摘される。冒頭五字「山静林泉麗」の平仄は五言絶句仄起式の起句と一致しており、前

半も正格の漢詩の一部である可能性があるだろう。ただしそれが中国漢詩か、日本漢詩なのかは詳らかではない。

また、その漢詩としての認定が悩ましいものとして、

稍晴發風離家數日糧纔曾除每日

家戀人別抱嗟〔註〕

日好遊※家看路遠更亦懷噫何（※Ⅱ「康」の右に「鳥」）

述其情〔註〕

閑居瞻庭雀態春辰風氣更冬誰知其由（目代国造豊足解）天平一一年

（七三九）一月二三日³³

がある。恐らく四字一句で、

稍晴發風、離家數日、糧纔曾除、每日家戀、人別抱嗟。〔註〕

日好遊※、家看路遠、更亦懷噫、何述其情。〔註〕

閑居瞻庭、雀態春辰、風氣更冬、誰知其由。

となると思われ、「詩賦に近い四六文」（橋本進吉氏「南京遺文解説」、『南京遺文附卷』一九二一年）や、家郷を懐かしがる詩三首（野間清六氏「奈良時代の戯画について」、『Museum』二四号、一九五三年三月）とされ、早くからその韻文的性格がみいだされていた。確かに四字一句である点、第一・二行の下にみえる小字注記様が、漢詩にみえる「其一」などの注記を思わせる点を踏まえれば、視覚的には四字句詩のようにみえる。また、例えば二行目の「遊※」は「游鶻独運」（『千字文』）に基くであろうことも、典籍の表現に拠って作文されていることをうかがわせる。しかし一方で、句末の押韻など韻律上の法則性をみいだすことはできない。『詩経』のような非固定的押韻の構造を持つ可能性もあるだろうが、現時点では漢詩風の散文と捉えるほかないように思われる。

またここまでみてきた木簡や正倉院文書の他にも、金石文の類には、四言体を主とする韻文——厳密には詩ではなく、「銘」と呼ばれるものがみえる。まとまった資料群としては銅鏡の銘文が挙げられるが、これらは概ね中国における作文であり、本書では上代の韻文とはみなさない³⁴。

上代の銘の一例を示せば、

琴之在音 盪滌邪心

雖有正性 其感亦深
存雅却鄭 浮侈是禁
條暢和正 樂而不淫

のように、正倉院宝物「金銀平文琴」（北倉二六）と、漢籍（後漢・李尤「琴銘」、『芸文類聚』四四・樂部四・琴）の双方に記されるものがある。これは中国の銘の確実な伝来例といえることができるが、その音韻に着目すれば、平仄には近体詩のような厳密な規則性は看取できないものの、偶数句末がいずれも押韻される³⁵特徴を持つことが理解できよう。同様の形式を持つものは墓誌にも、

天潢疏派、若木分枝。

標英啓哲、載德形儀。……（「威奈大村骨藏器銘」上平声・支韻）

儀形百代、冠蓋千年。

夜台荒寂、松柏含煙。（「石川年足墓誌銘」下平声・先韻）

との例がみえる³⁶。これらは音韻の規則性からいって明らかに韻文とみなしてよいが、これらと形態的な共通性を持ちながら、音韻面での韻文的特徴を持たない例もみえる。正倉院宝物「鳥毛立女屏風」（北倉四四）の銘は、

種好田良 易以得穀（入声・屋韻）
君賢臣忠 易以至豊（上平声・東韻）
諛辭之語 多悦会情（下平声・清韻）
正直之言 倒心逆耳（上声・止韻）
正直為心 神明所祐（去声・宥韻）
禍福無門 唯人所召（去声・笑韻）
父母不愛 不孝之子（上声・止韻）
明君不納 不益之臣（上平声・真韻）
清貧長樂 濁富恒憂（下平声・尤韻）
孝当竭力 忠則尽命（去声・映韻）
君臣不信 国政不安（上平声・寒韻）
父子不信 家道不睦（入声・屋韻）

とあり、押韻規則が守られていない。「鳥毛立女屏風」は国産であることが指摘されており³⁷、この銘文も日本人によって作文された可能性がある。

上代日本における銘は、中国的様式に則った韻文的性格を持つものと、その様式に類似しているものの散文と判断するしかない、恐らく日本的なもの二つに大別することができる。その最古例が「宇治橋断碑」であり、上代日本における銘の淵源をみることのできる資料といえよう。その本文は、

洩洩横流 其疾如箭 修修征人 停騎成市 欲赴重深 人馬亡命 從古至今 莫知航葦
世有釋子 名曰道登 出自山尻 惠滿之家 大化二年 丙午之歲 構立此橋 濟度人畜
即因微善 爰發大願 結因此橋 成果彼岸 法界衆生 普同此願 夢裏空中 導其苦緣

であるが、各句末における押韻は看取できない。様式こそ中国的な「銘」を模しているものの、そこに韻文としての性格を見出すことはできず、日本的な「銘」というほかない。

以上、上代の史料漢詩についてその発見と研究の状況について把握してきた。完形のもの、残存数は現在決して多くはないものの、断片は相当数が発見されており、今後の新出資料の発見も十分に期待できるだろう。ただし、その文字列が漢詩——中国語韻文としての性格を持つか否かは、何らかの判断基準を設けるべきであろう。その場合、前掲村田論文が挙げた平仄・押韻は、正格の漢詩を判別するための有効な手続きであることに間違いはないだろう。そのうえで、対象となる文字列が、音韻が不整備な日本漢詩である可能性も加味せねばなるまい。文字列に含まれる語句の典拠がどこにあり、その典拠となる文献が上代日本において如何様に摂取・利用されてきたか。そしてその文字列に和習が含まれるのか、その和習が他の上代の文献にはどのように表れるのか。音韻のみならず、こうした表現の面からの分析も踏まえ、総合的に判断するべきであろう。

四、むすび

本稿においては、『懐風藻』および歴史資料にみえる上代漢詩が、現在どのような研究状況にあるのかを概観してきた。繰り返しになるが、上代漢詩の研究は『万葉集』に比して圧倒的に乏しいといわざるを得ない。もちろん

それは『万葉集』が約四五〇〇首の和歌を収載するのに対して、『懐風藻』に収載される漢詩が約一二〇首であるように、現存する上代の和歌と漢詩との作品数の差に懸隔があることが最大の要因であろう。しかしそれを措いても、上代の和歌の研究水準と、漢詩のそれに大きな差があることは否めまい。現在、漢籍や漢訳仏典のデータベース等が充実し、漢籍の注釈書類も日本文学の比較文学的研究が以前に増して容易になった。上代文学研究においても、比較文学的研究は一つの方法論として確立されており、『万葉集』と漢詩文の比較も盛んに行われるところである。だからこそ、上代漢詩研究を通じて中国文学からの影響を探求することもまた、その重要性を強めているのではないだろうか。

中国的なものをどのように日本化し吸収したのかという、摂取咀嚼のプロセス解明が大いに学術的価値を持つことは論を俟たない。しかし、持ち込まれた中国的なものが全て無条件に吸い上げられたとも考えにくい。そもそもその取捨選択があつたことは想像に難くないだろう。何が取られ何が捨てられたのか、それはどのような事由によるものなのか、それを解明し、東アジアにおける中国文化圏・漢字文明圏の東端で成立した文学作品の一つとして日本古典文学を読むことこそ、比較文学的研究の方法論が発達した今日において有効な手段となりうるだろう。

今後の上代日本漢詩の研究においては、中国文学からの摂取に拘泥するのみならず、そこにどのような日本の独自性が内在しているのか、その起因となる事象は何なのかを明らかにすることが肝要となるだろう。そのうえで、後世、いわゆる国風暗黒時代の勅撰三集など平安期の漢詩への連続性を文学史的にとらえていくことが、翻って上代漢詩の文学的特性を見定めることにつながるのではないだろうか。

注

- 1 『万葉集』の歌番号は松下大三郎氏・渡辺文雄氏『国歌大観』(一九〇一)一九〇三年)の歌番号、いわゆる旧国歌大観番号によって引用されるのが通例だが、集中に収載される漢詩には番号が附されないため、ここでは例外的に『新編国歌大観』(角川書店、一九八三)の歌番号を用いた部分がある。
- 2 沢田総清氏『懐風藻註釈』(大岡山書店、一九三三年)は天和四年版本・宝永二年版本・寛政五年版本と群書類従本とを相互参照しており、杉本行夫『懐風藻』(弘文堂、一九四三年)は、寛政五年版本を底本に、宝永二年版本・群書類従本と対校し、その他『日本古典全集』・『校注日本文学大系』、『懐風藻新釈』、『歴朝詩纂』、『本朝詩紀』を参照している。林古溪『懐風藻新註』(明治書院、一九五八年)は寛政五年版本を底本に群書類従本を対校する。林長柯の追記には、校正中に『尾州本』(『蓬左文庫本』)を見つけたことが記される。
- 3 『懐風藻』未紹介写本三点(『汲古』六二二、二〇二二年一月)、田中教忠旧蔵本『懐風藻』について「未紹介写本補遺」(『汲古』六四四、二〇一三年一月)、『懐風藻』未紹介写本拾遺「早稲田大学図書館蔵旧黒川文庫本その他」(『早稲田大学日本古典籍研究所年報』七号、二〇一四年三月)など。
- 4 解題、および本文や注釈の性格については、土佐朋子氏編『静嘉堂文庫蔵『懐風藻箋註』本文と研究』(汲古書院、二〇一八年)を参照。
- 5 『解説(懐風藻)』(『日本古典文学大系』69 懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹)岩波書店、一九六四年)
- 6 例えば、『新釈』は、大津皇子「臨終、一絶(『懐風藻』七)について、金鳥は太陽の異名。太陽が西舎に臨むは、即ち落日なり。皇子が二十四の年も茲に終を告げんとす、漏声も鼓声も刻々に逼る。嗚呼二十四、短命を悲しまざらんや。泉路は冥冥、實も無く、主も無し。此の身を寄する果して誰が家ぞや。平平の語と誰も、哀哀の極みなり。などと、大津皇子の年齢や謀反に関わる処刑と詩を結び付け理解している。しかし、詩句や様式の典拠などには触れることがない。しかし六〇年代以降、『小島大系』や山岸徳平氏『懐風藻の成立』(『山岸徳平著作集』1 日本漢文学研究)有精堂出版、一九七二年)に、五代・江為「臨刑詩」や明清・金聖嘆「臨刑」との類想性が指摘され、さらには小島憲之氏「近江朝の文学——その詩と歌」(『文学』四三三、一九七五年四月)に、陳後主叔宝の「鼓声推命役、日光向レ斜、黄泉無客主、今夜向誰家」(『釈智光「浄名玄論略述」所引)が典拠である可能性が論じられた。六・七〇年代において既にその半世紀前とは研究水準の懸隔が明らかであったことがうかがえる。
- 7 佐佐木信綱氏『林古溪』(『ある老歌人の思ひ出 自伝と交友の面影』朝日新聞社、一九五三年)
- 8 「故 林古溪氏著『懐風藻新註』(『国語と国文学』三六卷五号、一九五九年五月)以下に挙げたもののほか、訳本であり厳密な意味の注釈書ではないが、棚沢龍吉氏『和訳詩集懐風藻』(学灯社、一九七二年)がある。また、猪口篤志氏『新釈漢文大系』45 日本漢詩 上(明治書院、一九七二年)には大津皇子「侍宴」(『懐風藻』一)のみ注釈が載る。
- 9 土佐朋子氏編『校本懐風藻(新典社研究叢書335)』(新典社、二〇二二年)、対校本の解題。
- 10 注釈対象詩・担当者は次の通り。
- 11 河島皇子「山齋」(三)——井実充史氏
大津皇子「春苑言宴」(四)——土佐朋子氏
釈智蔵「翫花鷲」(八)——荒川聡美氏
中臣大島「山齋」(二三)——顧姍姍氏
大神高市麻呂「從駕 応詔」(二八)——高橋憲子氏
采女比良夫「春日侍宴 応詔」(四二)——高松寿夫氏
大伴旅人「初春侍宴」(四四)——李満紅氏
藤原総前「侍宴」(八七)——梁奕華氏
- 12 「懐風藻の詩学(一)——先哲の遺風」(『懐風藻研究』四号、一九九九年五月)
「懐風藻の詩学(二)——置體の遊び」(『懐風藻研究』五号、一九九九年一月)
「懐風藻の詩学(三)——応詔の詩学」(『懐風藻研究』六号、二〇〇〇年三月)
「懐風藻の詩学(四)」(『懐風藻研究』七号、二〇〇一年一月)
「懐風藻の詩学(五)——儒と老の合一と美的規範」(『懐風藻研究』九号、二〇〇二年五月)
- 13 「懐風藻の詩と文」(汲古書院、二〇二三年)所収。
- 14 「侍宴詩について——作品構造とその類型——として『上代漢詩と中国文学』(笠間書院、一九八九年)所収。
- 15 「吉野詩の山水観——「智水仁山」の典故を中心に——として『上代漢詩と中国文学』(笠間書院、一九八九年)所収。
- 16 「懐風藻の詩」として『上代日本文学与中国文学 下』(塙書房、一九六五年)所収。
- 17 『漢語遣遣』(岩波書店、一九九八年)所収。
- 18 「石上乙麻呂「南裔の怨」——その鄙での別れと試作——(『愛文』三六号、二〇〇〇年一月)、石上乙麻呂の「旧識」に贈る詩と「麗人」を想う詩と(『美夫君志』七二号、二〇〇六年三月)、石上乙麻呂「衡悲」考——懐風藻所収の四首の詩から——(『文学史研究』四九号、二〇〇九年三月)
- 19 平城京左京三条二坊八坪二条大路濠状遺構(南)出土。城址上(430)
- 20 松尾善弘氏「近体詩の平仄法と構句法」(『アジアの歴史と文化』四号、二〇〇〇年五月)は、判読不能部分が「山」であると推定する。語釈につい

- ては拙稿「平城京二条大路出土木簡の「山東山南」詩について」（『美夫君志』九六号、二〇一八年三月）を参照。
- 21 木研3-12頁-5（2）（城14-13ト（79））
城15-13ト（55）。
- 22 同名で『万葉以前』（岩波書店、一九八六年）に所収
- 23 飛鳥藤原京1-248（木研21-22頁・37）・飛13-18上（97）
- 24 木簡黎明（41）（日本古代木簡選・藤原宮2-664・飛4-7上（37））
- 25 平城京3-5426（城30-38ト（1306））
- 26 木研17-163頁・（15）（城8-5下（36）・日本古代木簡選）
- 27 「望」は平仄両用。下平声陽韻ないし去声漾韻。
- 28 続々修一六帙三、大日古 一・一七六〜一七七
- 29 続修三二、大日古 一・五五三〜五六〇
- 30 続々集三九帙二紙裏、大日古 一七・四八六
- 31 『上代日本文学と中国文学 下』（塙書房、一九六五年）所収。
- 32 続々修四六帙九紙背、大日古 七・二二三・二二四
- 33 なお銅鏡の銘文の様式等に関しては、岡村秀典氏『鏡が語る古代史』（岩波新書、二〇一七年）に詳しい。
- 34 下平声・侵韻。韻字は一定句ごとに換韻される場合もある。
- 35 「威奈大村骨蔵器銘」については、小島憲之氏「伝来書推定の問題」（『上代日本と中国文学 上』塙書房、一九六二年）、東野治之氏「黄葉片々『庾信集』と威奈大村墓誌」（『万葉』一五号、一九八三年一〇月）に詳しい。「石川年足墓誌」については拙稿「上代墓誌における文学性——文飾と様式をめぐって——」（『文学・語学』二三五号、二〇二二年八月）を参照。
- 36 山崎一雄氏「樹下美人図（鳥毛立女屏風）」（正倉院事務所編『正倉院の絵画』一九六八年、日本経済新聞社）

（令和六年一月三十日受理）

Asuka and Nara Period Chinese Poetry , its Current Research Status

NAKATANI Kentaro

Abstract:

Japanese literature of the Asuka to Nara periods can be broadly categorized into Japanese texts and Chinese texts which are both written in Chinese characters and divided into prose and verse, respectively. The verse includes Japanese poetry (Waka) and Chinese poetry (Kanshi). Waka appear in the Manyōshū, Kojiki, Nihonshoki, and some other historical materials. Most Waka are handed down by manuscripts, causing spelling inconsistencies. However, some Waka remain as they were written at the time.

On the other hand, Kanshi are in literary works such as Kaifūsō and historical materials. In particular, Kaifūsō contains over 120 Kanshi from the Asuka to Nara periods. Kanshi can also be found on wooden tablets, archives of the Shosoin, or epigraphs. However, since Kanshi are less studied compared to Waka, there are many unknown aspects.

This paper provides an overview of the history and current state of research on Kanshi from the Asuka to Nara periods and discusses the direction of future research. It first organizes and criticizes previous research on Kanshi in Kaifūsō and historical materials from the Asuka to Nara periods. It then argues that although the research on Kanshi lags behind that of other literary works of the same period such as the Manyōshū, steady progress is being made. Finally, it discusses the importance of exploring Kanshi in the context of international relations in East Asia for developing an understanding of Kanshi studies, and for examining the uniqueness of Japanese Kanshi in the Asuka to Nara periods.

Key Words : early Japanese literature, Chinese literature, Chinese poetry, Kaihūsō

